

木村定三コレクションと熊谷先生に想う

福井 淳子

「熊谷守一」という画家の名前は、1960年代になってもそれほど一般に広く知られてはいませんでした。現在のように、作品があちこちの美術館でも見られるようになったのとは違い、作品の多くが四号という小さなサイズでもあるので、ほとんどの作品が個人コレクターのもとに大事に、大事に所蔵されていて、一般のひとが直接作品にふれる機会が少なかったからです。加えて、熊谷先生の作品は、豪華な応接間に華麗さや荘重さを添えるために飾られる、というよりは次のような個々のコレクターが静かに作品に向き合って対話を重ねるという傾向がありました。

外科医や、登山家は、自分が一瞬のミスも許されない厳しい日常をおくるので、熊谷先生の迷いのない線の厳しき、緊張感をより切実に感じます。株の取引で瞬時の決断を迫られるひとは、熊谷先生のかたちのきっぱりとした潔さに共感します。患者のさまざまな訴えに耳を傾ける内科医は、熊谷先生の絵のなかに、やわらかな日差し、さわやかに流れる空気、生きものの呼吸、何気ない日常のかけがえのなさなどを読み取ります。絶えることのない諸問題を片付けなければならない経営者は、熊谷先生の作品を見ているうちに、自分のなかの雑念が去り、気持ちがすっきりと洗われるといいます。家族のなかに心配事のある女性は、無邪気に遊ぶ子鳥を描く熊谷先生の墨絵を見て、熊谷先生の視線のやさしさに慰められ、元気がでてくるといいます。演劇人は、繰り返し熊谷作品をみるうち、自らの演技で過剰を排し、シンプルに本質を表現することの難しさを日々実感するといいます。絵との出会いはさまざま、人それぞれです。

ひとはある程度まとまったお金が手元にあるとき、どのような使い方をするでしょうか？ダイヤモンドを買う、不動産を買う、株に投資する、はたまた海外旅行を楽しむ……。絵を買うという選択はこれらと違った次元にあります。有名でもない画家の場合は、ひとえに買うひとの判断、決断によるので、ときには家族の理解を得られないことさえあります。

木村定三氏は「絵は買ってみてはじめてわかるようになる」とおっしゃっていました。最初は自分の直観で「これだ!」と思って買ったことが、はたしてその対価にふさわしい行為であったのかどうか、コレクターは自問自答します。自宅の落ち着いた空間のなかで改めて作品の前に端座し、あるいは朝夕身近に眺めることによって、自分が何に惹かれていたか、その作品の示すものが何か、作品との真剣勝負にも似て、作品との対峙が始まります。そのような時間の積み重ねのなかで、自分が払った対価にふさわしい、あるいはそれをはるかに超える精神的豊かさが得られると実感するとき、見ても、見ても、見尽くせない発見を見出

すとき、コレクターは大きな喜びに満たされます。私たちはともすれば、木村氏のような大富豪が絵を買うのは私たちが一万円のおもちゃを買うよりもたやすいことだろうと安易に考えがちです。しかし、木村氏のことは一点一点絵に向き合うことの覚悟の大きさ、真摯な時間の深さを示しているのです。

まったく驚くべきことに、木村氏が初めて熊谷作品に出会ったのは弱冠25歳。熊谷先生は58歳です。名も知らぬ作家の日本画の新しさやすばらしさを即座に見抜き、さらに作家自身の深さ、温かさにも惹きつけられて購入を決めたところに、教養に裏付けされた木村氏の審美眼の確かさがあらわれています。会期が終わって自宅床の間に掛けてどれほど長い時間、繰り返し、繰り返し作品に向き合ったことでしょう。「精神的感銘を受けると言うことは、人格完成の為の必須要件」と考える木村氏は以後、熊谷先生のひとと作品から汲めども尽きぬ感銘を受けてコレクションを続けていきます。書簡からも伝わるように、熊谷先生に対する尊敬の念は終生変わらず、ときにはあたかも親に孝養をつくすかのように、先生の体調を気遣って温泉に誘ったりもします。

木村氏も熊谷先生も非常に自分に正直に生きたひとです。嘘、世辞、媚びへつらいなどは身辺から厳しく排除しました。木村氏が純粹に、率直に、作品をみた自分の思いを伝えることはそのまま真直ぐに熊谷先生の胸に届いたことでしょう。木村氏の書簡に初めて接するひとのなかには「××をお描きください」などという文面に尊大さを感じるひともあるかもしれませんが、しかし、木村氏の人柄を知り、その尊敬の念を知ると、木村氏の書簡は過剰な修飾を排し、正直に簡潔に、要点をきっちり伝えていることがわかります。丁寧に綴られた文字には青年のひたむきさがあります。互いの人格にたいする深い理解と信頼があればこそその書簡です。

木村氏について、巷間、熊谷先生の作品を「百枚までは買ってやる」と語ったということがまことしやかに伝えられています。実際、私自身も熊谷先生が木村氏との出会いを語る際、「百枚までは買ってやるって言うんだよ」と話されるのを直接聞いた覚えがあります。しかしそのときの熊谷先生はさも楽しそうに笑いながら「こういう若者がいたんだよ」と、聞き手を面白がらせる調子でした。「先生の絵はどれもこれも名画であり何十幅何百幅あっても多すぎると云うことはありません（書簡0040）」、「小生も先生の日本画は名作壺百点蒐集の望に御座候（書簡0350）」という書簡からも伝わるように、出会って間がないのに、感銘を吐露し、「百枚でも買いたい」と途方もない希望を述べる青年に熊谷先生も驚いたことでしょう。しかし「買ってやる」は正確な表現ではありません。心底熊谷先生を尊敬する木村氏からそのような傲岸不遜なことばが出るはずがないからです。このことばが流布されて、木村氏自身は後年「先生がそう話されるのだから仕方がない」と苦笑いでした。

木村氏が絵画、骨董などのコレクションを持つ、という情報が少しずつ漏れるようになると、コレクションを展覧会に貸してほしい、という依頼も増えるようになります。「絵は買って初めてわかるようになる」と、一点一点に真剣に向き合ってきた木村氏にとって、絵に覚

1 木村定三「価値判断の物指」『南画研究』第2巻第12号、中央公論美術出版、1958年、8頁。

悟を決めるという経験も持たず、所有者の深い思い入れに対する想像力も持たぬまま安直に借りようとする相手は断りの対象となることがあります。厳しいコレクターという噂が、「買ってやる」発言と結びついて世の中の木村氏像を歪めているくらいがあるのはとても残念なことです。実際の木村氏は、絵をわかりたい、知りたい、という素朴な気持で素直に作品に向き合おうとする相手に対しては実に寛容で親切だったことを付け加えておきたいと思います。

熊谷先生の名前が知られるようになると、遠方から菓子折などもって先生宅に訪れる客や画商も増えます。中には何度も訪れるうち、親しみを感じて、色紙の一枚でも気軽に描いて貰えるかと期待したり、画料が安くなるかと考えるむきもあらわれます。木村氏はたびたび熊谷宅を訪れ、ときには自宅に熊谷先生を招いてその親交の深さは誰にも劣るものではありません。しかし、書簡にも垣間見られるように、また私が知っている範囲でも、木村氏が親しみに乗じて画料を安くする、あるいは展覧会で購入する場合にも値引きを要求するという例を知りません。先生の作品を高く評価するが故に、正当に対価を払う、それが良い作品をコレクションする王道であるという姿勢を貫かれたのです。ただし、熊谷先生の方から、誰かに感謝の意をあらわすために気持よく絵を描いたり、書をかいたりされる場合があります。木村氏との間でも、感謝や友情のあらわれであるやりとりがあったことは当然です。

熊谷先生は自ら進んで書画骨董の類を熱心にもてまわる方ではありません。ふだん客人が熊谷夫人と話しているときに、目の前の何気ない急須をじっと見ておられることがありました。どのように作られているか、注ぎ口や持ち手のカーブを自分ならどうしたいか、考えることがいっぱいある、とのことでした。

木村氏のご自分のコレクションを自慢気に見せびらかしたり、豊富な知識を誇ったりするという方ではありませんでしたが、熊谷先生を招いた折にはコレクションを出して見せることがあったでしょう。逸品ぞろいのコレクションは見ごたえがあったはずです。熊谷先生がどのようにそれらを見られるか、どのようなところに目をつけられるか、は木村氏にとってもわくわくする時間だったことと想像できます。書簡のなかにも登場するような「××をお描きください」という木村氏からの画題の希望や、骨董、仏像、江戸時代の水墨画などを見る刺激は熊谷先生の創作世界に新しい窓を開くことになり、表現の豊かさにつながりました。

木村コレクションのなかに皆さまよくご存じの《富嶽列松図》(M2890) (図1) があります。与謝蕪村の水墨画で29.6×138.0cmという大きな作品です。これは定三氏の父上の遺愛品だったそうです。大きな作品のため、ひろげて見るのは簡単ではありません。1957年11月、東京の日本橋三越で蕪村名品展が開催された折、この作品ははじめて公開されました。木村氏が知らせたものでしょう、熊谷先生がこの作品を見に行ったことが書簡によってわかります。その前の年の春、熊谷先生は脳卒中の発作をおこしたため、この頃はまだ一日中耳鳴りが続いて体調は万全ではありませんでした。翌年の4月になってようやく、筆無精を詫びながら木村氏宛に出された書簡で、熊谷先生は「蕪村画見ましたが夜の雪景は一寸さびし過ぎまして小生は富士の前松の木ある方が明るくて好きです」(書簡0630) (図2) と《富嶽列松図》

の感想を書いています。ここにも正直で率直な表現をみることができます。ところで、興味深いことに1957年11月13日の日本経済新聞に「蕪村名品展から」としてつぎのような記事がのりました。「日本のシンボル『フジヤマ』ともなれば、作家たるもの、一度は征服してみたいものであるだろう。ところが、現代の芸術家には、あまりにも整理されつくした端然たるあの容姿が、お気に召さぬらしい。近くは梅原芸術が敢然としてたちむかった以外、あまり問題になったことをきかない。たしかに、つきあいにくい存在というべきであろう²」。かなり挑発的です。当時文部技官だった鈴木進氏が、蕪村の《富嶽列松図》によせて書いた記事です。

2004年求龍堂から刊行された『熊谷守一油彩画全作品集』をみると、1958年作として4点の富士山を描く作品（図3～6）が掲載されています³。いずれもどこまでもひろがる青い空を背景に、遠景に清らかな白い富士があり、近景には松の木が配されています。横138.0cmという蕪村の作品に対し、熊谷先生の作品は横22.7cm、33.3cm、45.4cmとそれぞれサイズは違うものの、通常の小品です。見事に墨の濃淡を生かし、色はわずかに代赭を加えただけの蕪村に比べ、熊谷先生の富士は明るく多彩です。蕪村の富士は画面右側であるのに、熊谷守一《富士》《富士山》の富士は左側です。この4点は木村コレクションに含まれていませんが、一見すると蕪村とはかけ離れた作品のように見えます。ぎりぎりの省略形で描かれた松は、作品によって傾きや位置が異なって、工夫のあとがわかります。

この4点に描かれた富士とそれに続く山並みの姿は、木村コレクション中の鉛筆淡彩画優品《富士山に鳥》（M244）（1943年）（図7）を思い出させます。そして今回、書簡によって、蕪村作品と意外な接点のあることが浮かび上がりました。熊谷先生が実際に蕪村作品を見たこと、木村氏が上京して鈴木氏の新聞記事を話題にした可能性があること。木村氏が富士を提案し希望を述べただろうこと。これらが契機となって作品が生まれたと推測することができます。「遠景の富士、近景の松」という構図を借りながら、熊谷先生は「自分ならこう描く」とでもいうような「明る」い作品を制作されたのではないのでしょうか。木村氏のコレクションを見たからといって熊谷先生の作品が急に変わるということはないにしても、それが新たな制作意欲を刺激するということは充分あったのではないか、木村氏と熊谷先生の関わりりの深さを示す一例ではないかと私は考えています。

木村氏はコレクションを重ねるごとに、熊谷先生の精神的な深さや高さを実感し、新しい面を発見しました。熊谷先生の高みを理解するには自分も精神性を高めるよう努力しなければならない、熊谷先生の純粋な世界を理解するには、見る者も純粋な気持ちで向き合わなければならない、と考えていました。いつも熊谷先生を仰ぎ見るようであり、それでもなお汲み尽せないものを感じて、少しでも近づこう、近づこうとされていた気がします。ただ作品を集めるのではなく、作家の真髓がわかるような名作を集めなければならない、とも考えていました。書簡のなかに、時折、作品への不満をもらし購入をとりやめる、と率直な意見が記

2 鈴木進「蕪村名品展から」『日本経済新聞』1957年11月13日。

3 『熊谷守一油彩画全作品集』求龍堂、2004年、175～177頁。

されていることがあり、今残る木村コレクションが選び抜かれた粒ぞろいの作品であるのは木村氏の選択眼の厳しさを物語っています。木村氏が編集・刊行した『熊谷守一作品撰集』⁴を見ると、どんなに言葉を連ねても熊谷先生を表現しきれない、けれども何とかして熊谷先生のすばらしさを人びとに伝えたいという木村氏の思いが溢れています。

生涯にわたって熊谷先生を尊敬し続けた木村氏は、熊谷先生にすばらしい作品を制作してもらうためには何をすればよいか、を絶えず考えていました。熊谷先生の最晩年にいたるまで、折に触れ上京し、先生を訪ねて歓談するのを喜びとしていました。先生没後、熊谷守一美術館が新しく設立されて、木村氏が談笑されていた頃とは様子が違いますが、木村氏は美術館の核になる作品として、コレクションから《自画像》2点と絶筆《あげ羽蝶》を寄贈されています。作家を知るにはその作家の名作を見なければいけない、と信じる木村氏が、熊谷先生に関心をもって訪れる観客に名作を見せたいと考え、その一助としてコレクションを割愛したのです。ここにも木村氏の熊谷先生を思えばこそその真意を見ることができます。

木村氏はときに若い作家を応援することがあります。作家にとっては大きな励みとなります。その作品になにか惹きつけられるものがあるが、まだ何かよくわからない、というとき、簡単に優劣を判断するのではなく、その作家の作品を4、5点まとめて購入することがあります。なぜそんなに複数購入されるのかを訊ねると、複数の作品を家でじっくり見てみると、作家が見えてくる、わからなかったことがわかってくる、という返事でした。若いひとに対しても真摯に向き合い、予断をもたず作品から何かを学ぶ姿は、同時に木村氏の謙虚さを示しているようで、コレクションの起点を見たような気がしました。

今、愛知県美術館を筆頭として、全国の美術館には多くの熊谷作品が収蔵されるようになりました。これらの作品ひとつひとつが、かつてそれぞれのコレクターの手元で大事にされ、コレクターとの濃密な対話の対象だったということを想像し、作品の背後にはコレクターの熱い思いが秘められていることを知ると、作品の見え方もあるいは少し違ってくるかもしれません。

4 木村定三編『熊谷守一作品撰集』日本経済新聞社、1969年。



図1 与謝蕪村《富嶽列松図》(M2890)江戸時代中期(18世紀後半)紙本墨画淡彩
29.6×138.0cm 重要文化財

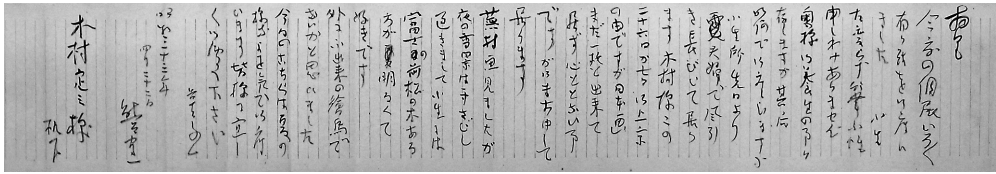


図2 書簡0630



図3 熊谷守一《富士》1958年 油彩・板
24.0×33.2cm 個人蔵



図4 熊谷守一《富士山》1958年
油彩・板 24.3×33.3cm 個人蔵



図5 熊谷守一《富士山》1958年
油彩・板 15.5×22.7cm 個人蔵



図6 熊谷守一《富士》1958年 油彩
37.7×45.4cm 個人蔵



図7 熊谷守一《富士山に鳥》(M244)
1943年 紙本淡彩、鉛筆 35.5×
49.0cm

木村定三と熊谷守一（本文pp. 88-001 (131)）



図1 与謝蕪村《富嶽列松図》(M2890) 江戸時代中期（18世紀後半）紙本墨画淡彩
29.6×138.0cm 重要文化財

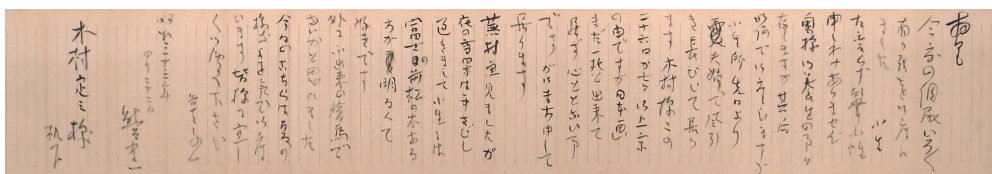


図2 書簡0620

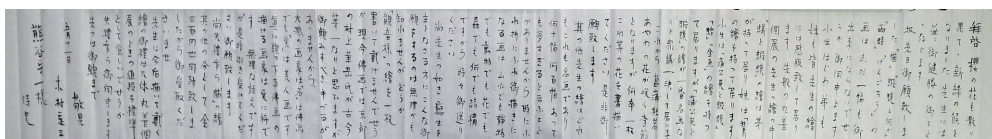


図7 書簡0040



図3 熊谷守一《富士山に鳥》(M244)
1943年 紙本淡彩、鉛筆 35.5×49.0cm



図4 熊谷守一《富士山》1958年 油彩・板
24.3×33.3cm 個人蔵